

中国における禅文化の文人文化に対する芸術表現上の影響

—「枯木」からの一考察—

張夢穎

中国宋代に禅文化が隆盛し、それが詩・書・画を含む文人文化に影響を及ぼしたことはよく知られている。発表者は、禅文化が文人の芸術表現上に与えた影響を研究テーマとしているが、その好例のひとつに「枯木」がある。

南北朝・唐代から、「松」や「竹」などは明確なかたちで描かれているが、「枯木」は樹木の名をあきらかにしない枯れた木として、山水画や花鳥画のなかのモチーフにとどまっている。それが北宋における文人画のなかでは、独立した画題として描かれるようになる。このことは、黄庭堅の「題子瞻枯木」や、朱熹が記す蘇軾の「枯木怪石」などから知られ、また蘇軾が代表的な画家とされていることが分かるが、そこで文人たちが表現しようとした精神性については、禅文化からの影響が注目される。

禅籍の中での「枯木」の用例には、「枯木生花」に関連するものが最も多く、「枯木龍吟」に関連するものがこれに次ぐ。よく知られたものでは、『碧巖録』第二則の「趙州至道無難」の頌に「枯木龍吟銷未乾」とあり、「咄。枯木再生花。達磨遊東土」と注されている。「枯木龍吟」「枯木生花」とも「情識が滅尽して本来の面目が蘇生する」より一般化すれば「死中に生を得る」という意味で、情識を滅却したところから、再び般若智を発するという、禅の主張の比喩的な表現である。

画題としての「枯木」には、文人たちの禅思想に共鳴する心理が窺えるが、その基盤にはやはり禅思想からヒントを得た「主客合一」の考え方があろう。文人画における「枯木」は、唐代以前の「枯木」の衰亡・物寂しいイメージと、伝統的な画題である「竹」「松」などの高節と生命力が明瞭に示されるイメージとは異なる特徴を持ち、枯れたと見える外見のなかに、再び花が咲く根源的な力が表現されているといえる。彼らは自身も「枯木生花」の境地に至ることを望んでいたのだろうか。本発表では伝蘇軾の「枯木怪石図」、王庭筠の「幽竹枯槎図」などを見ながら、文人たちが「枯木」に込めたものを考えてみたい。